

家路

子供たちの遊ぶ姿がお寺の境内から消えた寂しさを感じつつ、草むしりをしながらかつての日本の原風景を思い出します。お寺の周囲は、随分変貌を遂げました。近郊の水田や畑が減り続け、新しい建物が増えました。五十年前と現在の人口にあまり変わりがありません。むしろ五件に一軒が空き家の状態です。

私が子供の頃、夕焼けを背に、遊び疲れて我が家へと急ぐ帰り道。待ってくれていたのは、家の灯りと「お帰り」という一言と温かいご飯でした。今にして思えば、恐ろしいほどの幸せな時でした。

さて、ドヴォルザーク作曲の「新世界より」の中に邦題「家路」という曲があります。原題をたずねると「我が家へ」「故郷へ」ということになりました。私達の世代には「遠き山に日は落ちて」のフレーズがあります。キャンプの夜の集いに口ずさんだ歌ですが、歌詞を読み込めば、私達が最後にたどり着きたい姿を表しているように感じます。

もし人の一生を旅路に準えると、人生という業を成し終えて、旅路の最期に我が家（故郷）へと帰ります。向かおうとしている所は、私が望むというより、むしろこの私の帰りを待ちわびてくれている場所なのです。

